

〈研究ノート〉

韓国大邱から沖縄宮古への朝鮮人被強制連行者—徐正福の証言

清川 紘二・桜井 国俊

要 約

本稿はアジア・太平洋戦争下で行われた日本政府・朝鮮総督府による朝鮮人被強制連行者、徐正福氏の2度（2006年12月、2007年4月）にわたるインタビューからの抜粋である。農民であった徐さんは1944年6月に慶尚北道達城郡嘉昌面の自宅で拉致され、沖縄県宮古島に連行された。宮古に上陸後は、軍夫として艦船からの荷物の揚陸作業を行った。徐さんは3000人の強制連行者のうち唯一の日本語のできる朝鮮人であったため、軍夫長と言う重要な役職につき、軍隊と軍夫との通訳等も行った。宮古における軍夫の使役の状況、米軍爆撃の様子、日本軍人による差別、朝鮮人慰安婦のエピソード等についての詳細な口述は、沖縄における朝鮮人軍夫の状況をよく伝えている。徐さんの語りは、2006年6月沖縄大学で講演した被強制連行者、姜任昌氏（慶尚北道英陽郡出身）による阿嘉島からの報告とともに、朝鮮人強制連行史における宮古島の空白のページを埋める貴重な証言である。

キーワード：強制連行、韓国慶尚北道、大邱百三中隊水上勤務隊、宮古島の「従軍慰安婦」

強制連行の背景

【桜井】 忘れもしませんが、2006年6月22日でしたね。沖縄での戦後61回目の慰霊の日を迎える前夜に、清川さんが韓国慶尚北道英陽から朝鮮人強制連行の語り部、姜仁昌さんを伴って沖縄大学に現れたのは、学生も市民もはじめて聞く話であり、強制連行された朝鮮人軍夫の鮮烈な体験談は、かつてのアジア太平洋戦争下の日本帝国軍隊の行為を、その日常の内側からあぶり出すものでした。連行地阿嘉島でくりひろげられた処刑の光景は、強制連行の本質を象徴的に物語っています。

さらにその年の暮れと翌年の春に、清川さんはふたたび大邱を訪ね、宮古に強制連行された徐正福さんに会っています。しかし、今日までそれは発表されていません。もう一人の語り部の貴重なヒヤリングの記録を、2006年の講演の記録パート2として、沖縄大学の『人文学部紀要』誌上に収録させてもらうことにしました。紙面の都合上、すべてを掲載することはできませんが、まずは徐さんへのヒヤリングに至る経緯をお聞かせ下さい。

【清川】 かねてより、86歳の姜さんとほぼ同じ世代の方がもう一人大邱にいらっしゃる、しかし、その方は証言を拒否されており、まだ誰も話を聞くことができないと聞いていました。はたしてお会いできるのか、証言を得られるのか、はなはだ疑問でしたが、知人の金銀植（日韓近現代史研究家）さんに同行を願い、アポなしで所番地から住まいを割り出し、訪問しました。幸いにもご在宅で、びっくりしたようではありましたが、快く会って下さいました。驚いたことに、60数年ぶりに使う日本語であるにもかかわらず、通訳が不要なほど流暢な日本語で、し

かもメモなど一切なしの、記憶に基づいた詳細で具体的なお話を伺うことができました。

【桜井】徐さんはどういう生い立ちの方ですか。

【清川】徐さんは生後3ヶ月で父親を亡くし、母親の手一つで育てられました。家が貧しかったため、公教育は一切受けられず、7歳の時から農家に住み込みで働きました。ただし勉学の志は強く、独学で日本語を学んでいるところに、運良く砂防工学の日本人技師、田爪吉宗先生と出会い、7歳から9歳の2年間、毎夜田爪さん宅に通い、日本語を学びました。それが縁で、14歳の時に全郡選抜の伊勢皇大神宮参観使節団の試験に合格し、30名の使節の一人に選ばれました。後に、鉱山で働くようになってからも、日本語が出来るということで特別の高給をもらい、17歳で瓦ぶきの屋根の立派な家を建てました。また、強制連行時代にも3,000人の軍夫の中で日本語の出来る唯一の人ということで、軍夫長に指名され、優遇されました。

【桜井】ところで、強制連行の歴史の概要を説明してもらえますか。

【清川】朝鮮人強制連行は、日中戦争(1937年7月7日)とそれに続く対米英戦争(1941年12月8日)の開始によって、軍隊や軍需産業への青壮年男子の大量動員が始まり、それによる国内基幹産業の労働力不足を補うために本格化しました。

朝鮮人連行は、「募集」方式(1939年9月～42年1月)、「官斡旋」方式(1942年2月～44年8月)、「徴用」方式(1944年9月～45年8月)の3段階で行われました。当初は企業が募集し、郡、面(村)の職員と警察官が協働して労働者を確保する「募集」方式が採られました。が、動員が困難になってきた段階で、朝鮮総督府朝鮮労務協会が労働者を組織し、企業に斡旋する「官斡旋」方式に変わり、さらにその後、労働者の枯渇が極限に達すると、「徴用令」が実施され、法律による徴用が行われたのです。これらの連行方式は内容に違いがあるようにみえますが、朝鮮人にとって募集、官斡旋、徴用方式は、そのいずれもが本人の意思とは無関係に行われたという意味で、「徴用」であると受け止められていました。

徐さんが連行された1944年には、戦争末期の強制連行方式が破綻を来し、なりふり構わぬ暴力的な拉致が常態化していました。北海道炭鉱汽船株式会社の霊光郡の送出責任者から釜山の駐在員に宛てられた1944年5月31日付書簡に、当時の状況が報告されています。「郡庁職員9名を警察署高等経済係員及面職員を総動員、寝込みを襲ひ或は田畑に稼働中のものを有無を言はず連行」「郡庁より8名の労務係を各面に派遣を乞ひ面職員及駐在所巡査と協力各部落に宿泊狩出し」「夫々理事長に責任数を定め送出するか或は本人出勤する様郡、警察、面長等より夫々申渡し」「郡庁迄連行中逃走せしもの或は宿舎にて逃走せるもの不具合者或は老人(息子逃走身代わりとして父親を連行せる者)病人等多数あり」、「送出に無理せりたる為家族等と郡職員及面職員との間に大乱闘あり労務主任、次席等は顔面其他を殴打され負傷する等の騒ぎあり」(以上、外村大『植民地朝鮮の戦時労務動員—政策と実態—』)。このようにして強制連行された朝鮮人は、1939年から1945年の間に72万人(公安調査局調べ)を超えました。

徐さんへのインタビュー

拉致と連行

【徐】私は1944年6月、慶尚北道達城郡嘉昌面冷泉洞534番地で21才の時に連行されました。当時は農業をしていましたが、佐々木巡査部長、柏尾面書記の2名が達城郡守名の徴用令状を持って現れ、目的も理由も言わずにその場でいきなり私をトラックに乗せ、達城郡庁の庭まで連れていきました。その晩は郡庁前の公会堂に泊められ、翌日、大邱八十連隊の練兵場に連行されましたが、そこで球(タマ)8884部隊が編成され、私はその部隊に入れられました。そして、大邱中学校へ行き、そこで6日間宿泊しました。着ていた衣類は全部脱がされ、それを故郷に

郵送し、かわりに冬物の軍服を着せられ、隊列を整える訓練を受けました。将校が来たら敬礼することなども訓練されました。「エイシャゼンノホショウハ、リクグンレイシキニヨリ、エイハイセイレッツヲウクベキモノガキタルトキハ、セイレットヨブベシ」（「営舎前の歩哨は、陸軍礼式により、衛兵整列を受くべきものが来るときは、整列と呼ぶべし」と、衛兵司令官から習いました。営舎門前に7人の兵がいて、7名が全員出て、一列横隊に並び、異常があったら「異常あり」、異常がなかったら、「異常なし」と報告します。その報告を、受くべきものは中隊長、小隊長、下士官軍曹以上の者でした。

徴用令を受けて集められた朝鮮人は約3,000人ほどで、4個大隊に編成されました。私は達城郡でしたが、その他は全員慶尚北道出身の農民です。「ミギムケミギ、ヒダリムケヒダリ」という訓練を受けましたが、朝鮮人は誰もできません。日本語がまったく分からないものだから。4個中隊のなかで、日本語ができるのは私1人だけでした。大邱府の人は、1人も徴用されていません。徴用されたのは農民です。農民は学校も行っていないし、日本語が全然わからない。「アト」とか「ウシロ」とか、日本語で言われても、他の人はまったくわかりませんでした。

出発の日に私は軍夫長という特別の地位に任命されました。赤い糸で刺繍された三つ星を襟に付けました。軍夫長は徴用された3000人軍夫のなかで一番偉い。気分がとても良かったです。1週間後の午後6時、貨物列車に乗って釜山に行き、徳十丸で下関に向かいました。徳十丸は関釜連絡船です。下関駅前の広場で3日間過ごし、旅館には泊りませんでした。下関から、1万トン級の台北丸に乗って鹿児島へ、そこに2日間野営しました。鹿児島からは駆逐艦のまわりに25隻ほどで船団を組んで、南方方面へ向かいました。全船が軍の物資、食料や弾薬や大砲などを積んでいました。南方方面に行くということだけは何となく分かったのですが、沖縄に行くということは全然知らされていませんでした。その時、沖縄がどこにあるか、位置はもとより名前さえも知りませんでした。

沖縄へ向かう途中、船倉で何名か死にました。船底には、板で三段の棚が作られていて、その棚に、大勢の軍夫が詰められて乗っていました。外に出ることもできない、小便を外ですることもしない。7月初めでしたから、暑くて、随分汗が出ました。軍服が、塩分で真っ白になった程です。

1日分の水の配給は、1人水筒1個分だけ。それを24時間に分けて飲むんです。食事は1日1回の玄米飯と梅干ひとつだけでした。玄米飯は飯盒の上蓋に八分ほど。私は小隊長や中隊長が食べた残りを食べることができましたが。

【清川】沖縄の7月は真夏ですよ。冬物の軍服を着ているので、汗が一層激しく出る、船内は高温でむれる、体調を崩す、病気になる、そして衰弱してしまう。死人が出たのですね。

【徐】そうです、そうです。1週間間に何名かが死にました。人数は分かりません。4日後に港に入りましたが、それがどこか地名も知らない。そこに住んでいる人に尋ねたら、ここは沖縄、那覇だと言いました。

宮古島と水勤隊

【徐】4個大隊の1つとして、大邱隊101中隊がつくられました。それが水上勤務隊です。私達の水勤隊は宮古島に行きました。宮古の平良港には、船が毎日入って来る。船が着いたら、物資の揚陸作業をする。弾薬や食料、軍に必要なあらゆるものを全部積んでいました。船が埠頭に接岸出来なかったので、上陸用舟艇にいったん荷物を降ろし、その上陸用舟艇で埠頭まで運ぶ。豊5656（トヨゴロゴロ）部隊の出張隊が揚陸作業を手伝いました。宮古にはおよそ3ヶ月いました。

【清川】 食事や寝るところはどうでしたか。

【徐】 食事については、私は小隊長、中隊長の食い残りを食べていたので、腹は減ったことはありませんでした。しかし、軍夫は飯盒七分ほどの飯を2人で分けて食べるんです。それはひどいものでした。おかずは、1日梅干1個。けれど、宮古では軍事物資の中に缶詰もあるし、他の食べ物もいろいろあり、適当に盗って食べました。

今も忘れられないのですけれど、到着したその日の夕方に点呼があり、中隊長の初めての訓示がありましたが、我々にはわけがわかりませんでした。「君たちは、今日から名誉な応徴士だ」

「大日本帝国軍隊は命令で動く、私の命令は天皇陛下のご命令だ。だから君たちは、かならずジツテキ、イチシェンシャを撃滅すること、十敵、一戦車を！！」と言われましたが、竹槍ひとつも無いのに、どうやって撃滅するのですか、おかしいじゃないか、と思いました。

こんなこともありました。宮古島の住民が船で台湾に出かけ、玄米を積んでくる。それを埠頭に降ろして、豊5656(トヨゴロゴロ)部隊の出張隊のトラックに積む。台湾米を買ってくるか、盗ってくるかは分からなかったですけど。

3月1日、船は米軍の空襲下で入港できない状況でした。にもかかわらず、夜12時ごろ、陸軍の物資を積んだ豊坂丸、大建丸2隻の船が入港しました。師団司令部から至急の呼出し命令が出て、勤務にすぐつくようと、私の名が呼ばれました。「12時間以内に、揚陸作業を完了せよ」

「12時間以内に終わることができない場合には、特別な申し付けがある」と。至急荷物を埠頭に引き上げ、トラックに積み込め、という命令でした。万が一、12時間以内に作業が終わらない場合は責任をとらせる、その責任は水上勤務隊にあるのであり、上陸用舟艇や陸上の出張隊、豊5656部隊に責任は無い、と。誰に向かったの命令なのか、はっきりとはわかりませんでした。が、しかし、もし完了出来なかった場合は私たちに責任をとらせ、私らを殺すのだと思いました。

空爆と位牌

【徐】 3月1日午後2時～3時ごろ、空襲警報が鳴りました。米空軍がグラマン戦闘機を先頭に、爆撃機約60機ほどの編隊で飛んできて、空襲が始まりました。爆撃が始まると5分間以内に、日本の船、大建丸と豊坂丸が撃沈されました。船の中にいた揚陸作業の軍夫達は、どうなったと思いますか。浮き袋はひとつも無い。身体に付けていたのはふんどし一枚だけです。泳ぐこともできない。船の中には軍夫達が一隻に150名ずつ乗り込んでいました。2隻で300名。生きて帰った人は1名もいません。全員死んだのですよ。これは事実です。

2隻は撃沈され、空襲は終わった。撃沈と轟沈と違うんです。轟沈は20分から30分ほどかかって船が沈むことをいう。撃沈は、5分以内に船が沈没してしまうことをいうのですよ。撃沈されたんです。私らの仲間の軍夫は全員死んだのです。その翌日、風が吹いて、死んだ死体が、海の中から浮かび出た。風が吹いて波が起こった。波に運ばれて、海岸に死体が着いた。漂着した遺体が、69体でした。遺体は私等が数えました。私等が海岸から遺体を引上げ、火葬にふしました。遺骨を入れる壺が無いんですよ。セメント袋の中の紙がきれいだったので、その紙に遺骨を包みました。同じ面(村)の人は顔が分かるので、各自顔がわかる人の骨を引き受けて保管し、米軍の捕虜収容所に入っているときも保管し続けました。後で、故郷に帰った時に亡くなった方の家に持参し、家族に渡しました。私も1人の骨を持ち帰ってご家族に渡しました。その後、福地曠昭先生が書いた本(『哀号・朝鮮人の沖縄戦』月刊沖縄社、p.84)を読むと、71名が火葬されとありました。祥雲寺という宮古島にあるたったひとつのお寺で、そこのお坊さんたちが死体を引き上げ、火葬して戒名をつけた、そして位牌をつくり、保管していると書いてあります。亡くなった人たちの名前はもちろん分かりません(筆者注:『哀号・朝鮮人の沖縄戦』によると

71名というのは祥雲寺に祀られていた朝鮮人位牌の総数であり、宮古での海軍飛行場（現空港）の建設などの重労働に徴用され飢えとマラリヤで亡くなった犠牲者を含む数である。従って、2隻撃沈の犠牲者がこの中の何名かは不明である。

その空襲を受けた翌々日、私は軍夫80名を連れて、師団司令部の農場に派遣され、そこで農業をやるようになりました。軍隊は崩壊しちゃう、それが3月3日。1日に空襲を受け2日が遺体の引き上げた日で3日が農場へ向った日です。農場では芋を植えました。芋を植える農業は、戦争が終わり、解放されるまで続けました。約2ヶ月間です。

宮古島の「従軍慰安婦」

【徐】こんなこともありました。平良港に上陸して3日目に、宮古島にも、朝鮮人の「慰安婦」が35名上陸してきました。彼女達は港の近くの民家で寝泊まりし、3日間そこで過ごした後、ハコバン（板で囲った家）を建てて移りました。慰安婦達は可愛そうでした。私たちは月一回の休日の水曜日には、朝食を食べた後にならず外出しました。皆、営門に向かって走る。営門を出ると、今度は「慰安所」に向かって走っていく。営門の前に木の箱が置いてある。木の箱に、サックがいっぱい入っている。とにかくそれをつかんで、ポケットに入れる。3つも4つも。それから先を争って走って「慰安所」へ。着いてみるともう先着が7名も9名も待っている、日によっては11名も12名も列を作って並んで待っている。先頭の人が帯剣、ゲートル、鉄兜と水筒をとり、先頭から3番目の軍夫にそれらを預ける。室に入ると慰安婦の頭の上に、15円のぐんぴょう（軍票）を置く。判の無いものでした。軍夫はみな「慰安所」に行きました。そうせざるをえない空気がありました。自分だけ行かないわけにはいかない雰囲気でした。「明日死ぬのかもしれない、分からないもの、遠慮をする必要がないんだもの」、みんなそんな気分でした。この時のことは、現在も時々生々しく思い出し、眠れないことがあります。夢に出てくるんですよ。裸のまま畳に横たわり、布をかけて寝転んでいる「慰安婦」、外にならんで順番を待っている兵隊、その光景が浮かんでくるんです。

またある時、こんなこともありました。師団司令部の農場の畑には、白菜やキャベツを植えていました。そこに「慰安所」が出来、平良港の近くの「慰安所」にいた女達35名がそのまま移って来たんです。農場には柳の木があり、ある時、3人の「慰安婦」が柳の下で話をしていました。その日の農場監督は宮本少尉と私の2人でした。宮本少尉はとてもおとなしい人で、私を呼んで言うんです。「あそこで女たち3人が涙を流しながら話をしている。朝鮮語で話をしているので、俺にはわからない。どうして涙をながしながら話しているのか尋ねてこい」と。私が行き、そう訊ねると、「あの白菜、3個をくれたら、唐辛子と塩を入れて、漬物を作って、この世の別れにキムチご飯をもう1回食たべて、それから死にたい、そうしたら思い残すことはない、ハンが消える」と話してくれました。ハンというのは、恨みのことです。宮本少尉は彼女等の言うとおりにしてやろうと言いました。宮本少尉が彼女達をこっちに呼んで来てくれと言うので、私が手招きし、朝鮮語でこっちへ来るように伝えました。宮本少尉が1人に2個ずつ白菜を渡しました。彼女達は「ありがとう」と言って、喜んで持って帰りました。翌日、35名で分けて食べたと言って、全員が宮本少尉に手をついて、感謝の言葉を朝鮮語で言いました。それを私が通訳しました。

差別と復讐

【清川】島によっては自決せよとか、手榴弾や青酸カリを配るとか、軍命があったところがありました。宮古島の場合はそういうことはあませんでしたか。

【徐】そういうことはありません。軍命のようなものは全然なかったです。爆弾とか手榴弾とか、そういうものは、はじめから私らにはくれなかったのです。

【清川】事故や事件はありませんでしたか。

【徐】事件はありました。戦争中に日本の兵隊は朝鮮人に悪行（暴力）を働きました。戦後、その軍人たちの居るところは分かっている、夜になると朝鮮人達が襲撃に出かけて行き、棍棒で殴って、殺したということがありました。一度ではありません。そういうことがしばしば起こりました。何名かは分かりませんが、日本兵で殺された人はたくさんいました。敗戦後のことです。私が朝鮮人の中に割って入り、暴力を振るってはいけないと、止めました。人間は悪い人もいるし、良い人もいるし、普通の人もいます。あれは戦争下のことで、今、そういうことをやってはいけなかったのです。

【清川】それで止まったのですか、すごい。

【徐】実際に皆言うことを聞き、止めました。

【清川】8月16日の午前に日本の敗戦が分かった。その後のことですね。

【徐】何故だと思えますか。日頃、朝鮮人軍夫は日本兵の行為に悪感情を持っていました。とくに軍夫を呼ぶ言い方が悪く、反感を買っていました。日本の兵隊が軍夫を呼ぶ時に、「ちょっとこちらへ来い」というふうに言えば、どうということはないのです。ところが、かならず「おい朝鮮人、馬鹿野郎、大原軍夫長、馬鹿野郎、貴様、こっちへこい」というふうに呼ぶので、それにもっとも気分を害していたんです。そう呼ぶその人間に対して、私は恨みを持ちました。その気持ちはありましたけれども、しかし、私は人間として、今は戦争をしている時ではない、暴力で仕返しをすべき時じゃない、そう言って止めたのですよ。暴行をして、人を殺すということに対して、それは良くないと。

【清川】そういう呼び方に日本軍隊の朝鮮人への差別観を強く感じ、我慢がならなかった。戦争が終わり、天地がひっくり返って、棍棒であの時の思いを晴らそうと殴り殺したわけですね。

【徐】そうです。差別をされてきたことに対する復讐です。差別では対等に話ができないということです。

差別については、こんな思い出もあります。戦闘が宮古で終わった直後の事です。日本兵が私ら軍夫を差別する仕方は、思い出すのもいやなほど酷いものでした。例えば、北国民学校の教室に泊まった時のことです。1個小隊7名の日本人が私達を監督する。私らは、1個分隊75名です。ひとつの教室に、雑糞とか、私物とか、そういう物をざるに包んで壁から壁まで横に並べて、半分ずつの境界線が張られました。日本人の1個小隊7名の奴らは、その片方を占領して寝るんです、たった7人で。私ら75名は残されたもう半分に寝るんですよ。窮屈で、たまったもんじゃない。あなたならどういうふうに考えますか

食べ物もそうでした。私らは、飯盒に七分入った玄米飯を2人で分けて食べる。おかずは梅干ひとつ水の入った水筒1本それで1日分でした。こういう処遇で軍夫を扱って、利用し、働かせていました。たばこも、配給がありました。1人1週間分としてたばこひと箱。金鶏勲章の絵のかいてある箱に、タバコが10本入ってるんですが、10本入っているはずの1箱に2本しか入っていない。8本は、奴らが抜き取っちゃう。私らはこの2本で1週間のあいだ過ごすことになる。結局、3人、4人、5人と集まって、回し飲みして吸いました。私が少し吸う、別の者が少し吸う、また別の者が少し吸う。使役という言葉がありました。「お前、ちょっと来い、あっちに行って、言ったとおりにやれ」と言う。1日中、瓶の中に米を入れて棒で突いたり出したりさせられた。白米にするんですよ。ところが、その米を炊いて飯をたべるとなると、奴らだけが境界の反対側に座って食べる。境界のこちら側で、米をついた私等はただ見ただけです。

やつだけが白米飯を食べるんです。2名ほどの使役を出してくれという。出してやったら、そういうことだ。それを自分達7名だけで食う。

また、こんなこともありました、1945年1月1日、お正月のことです。馬を殺して、馬汁を作り、食べるんですよ。肉は全部、奴らがバケツに入れて持って行って食べてしまう。私らにくれるのは汁だけです。そういう酷い差別が目の前であっても、私らは文句を言うことができない立場だったから、しゃくにさわったけれども、見ているしかありませんでした。そのことに対しては今でも消えない怒りがあります。今、その当時の日本人に会ったら、万が一彼らが現れたら、殺してしまいたくなるほどの激しい憎しみの感情が今も残っています。

人間以下の扱いでした。呼び方も、「おーい、大原軍夫長、こっちへ来い」と言えば良いんです。そうしたら私達からもやさしい言葉が出てくるんじゃないですか。だけど、かならず「馬鹿野郎、貴様、朝鮮人、大原軍夫長」というふうに呼ぶ。いまだに私の頭に残っている感情は、この時のことです。将校は、全然そういうことはしませんでした。人種差別は絶対にしませんでした。普通の兵隊の程度が最悪、最低。話にならない程でした。

遺恨と恨歎

【徐】私の胸の中には一つ、消せない忌まわしい思い出があります。拉致され連行された日は妻と結婚して52日目でした。突然、彼らが家に来て、私を引っ張りだして、連れて行ったのです。妻は驚き、泣いて、大邱八十連隊の金網のところへ毎日会いに来ました。私の顔を見るために、金網の外に立っているのです、涙を流しながら。涙を流しながら、鉄線越しに見つめ合うしかない、遠くて話しができないのですから。お互いに目で見て、涙を流すことしかできなかったです。私は21才。妻は19才でした。

【清川】今、そうしたことを振り返って、連行された立場から何をおっしゃりたいですか。

【徐】いや、まずは話したくない。話してくれと今までも言われましたが、そのつど断ってきました。沖縄と言えば、それを聞いただけで、私は耳が痛くなります。戦後も沖縄には行きたくなかった。沖縄と聞いただけで、歯を自然に食いしばっているんですよ。沖縄には行きません。ハンを晴らしたらいいんだけど、晴らせない。晴らすことができないんです。

【清川】日本は今、歴史の大きな曲がり角にきています。「軍夫連行」も「慰安婦連行」も強制ではなかったと言おうとしている政治家がいます。同じ保守政権の時代でも、戦争を体験した方たちがいた90年代までは、総理大臣達も個人としてですが、不十分ながら謝罪を表明していました。ところが今の若い安倍総理大臣は、「強制連行」「慰安婦」について、軍隊が家へ踏み込んで手を引っ張って連れて行くというような強制性は当時の記録からは確認出来ないと言い、結果的に無視していく。今、日本は、歴史的事実の検証が問われています。

【徐】世界的に、「強制連行」、「徴用令」という法律が、どの国にありますか。牛馬を徴用するように人間を徴用する国がどこにありますか。

【清川】強制連行は朝鮮総督府が日本内地側の要請に応えるかたちで実際には面（村）職員と警察官等が実行した国策による政策として実施されたものです。国家政策によって組織的に行われた事実をぼかすことで、責任の所在を曖昧にしてきた歴史があります。沖縄は400年前に薩摩に侵攻され、明治維新で併合された、植民地化の歴史があります。私は支配民族の一員であり、徐さんのハンをそのまま共有する立場にはありません。しかし、沖縄への朝鮮人強制連行という事実とその意味を検証をしていくことで、朝鮮からの「恨（ハン）」を追跡する回路とつながることを願ってきました。日韓の記憶と体験を統合する場のひとつとして沖縄を考えてきました。

【徐】今、私は体が不自由です。宮古島にいた時代、諏訪軍曹に竹棒で殴られたのが原因だそうです。慶北大学病院で検査を受け、そう診断されました。当時の傷が黒く残っています。

【清川】それこそ「恨（ハン）」じゃないですか。ハンがうずいてるんですよ。

【徐】そうです。そのことです。恨が。恨が今から先も、もっともっと後まで残るんです。だから沖縄へは、私は行きたくはなかったのです。

【清川】はじめて良く分かりました。そういう形では行かないほうが良いと思います。

【徐】もう歩くことができないのでね。恨は、私の運命だ。生まれて、一生暮らす運命だと思って、私の心にそう言いかかせてきた。しかし貴方にこうしてお話を聞いてもらって、今、心がうるうるしてきています。

【清川】徐さんのハンが、僕に少し乗り移ってくるようです。目の前に、この辺にハンがきましたよ。もう少し月日が経つと、徐さんの心がいくらか軽くなっていると思います。僕は強制連行の検証を大和の側から遂行していくことが、徐さんのハンを解く道筋につながっていくように思い始めています。

【徐】貴方と話しているうちに少し心がゆるんできました。ずっと気持ちが軽くなった。ちょっと心が楽に感じられるように思います。これからも何か少し努力をしてみたいという気分になっています。(2007年4月)

追記—読まれざる一章

ヒヤリングはひとまずここで終わった。そして一時の談笑を経た後、帰り支度をしている私に、徐さんは意を決したように話しかけてきた。もの静かに丁寧な言葉使いではあったが、その分、内に秘めた想いの強さが伝わってくるものだった。「ここにある預金通帳を見て下さい。45年の夏の戦争が終わるまで、私が軍夫として働いた労賃は支払われず、そのまま積み立てられていました。1945年6月で1650円となっています。お願いがあります。この預金は今の金額に換算しますといくらになるのか調べて下さい。今までこの事を話すことの出来る日本の方にお目に掛かれませんでした。貴方を人と見立ててお願いします。いくらになるか調べて教えて下さい。私はこの金が手に入ればそれを治療費に当てたいと思っています。そして今少し生きながらえたい、妻を置き去りにすることは出来ないのです」と。

しかし、翌年報告にうかがうべく連絡をすると、徐さんはその直前に他界されていた。享年86歳であった。宿題への回答は、読まれざる手紙となってしまった。

「徐 正福 様

お尋ねになりました預金の件、ここに謹んでご報告させていただきます。

昭和20年の1,650円は、平成21年には1,650円×1,750倍＝2,887,500円の価値となります。平均金利5%と仮定し、1年定期で預入して元加継続した場合、1,650円×25(1.05の66乗)×1,750倍＝72,187,500円です。この金額は、日本銀行ホームページよりCPI消費者物価指数により算定したもので、客観性のあるものです。

日本帝国臣民の末裔 清川紘二拝

(英題)

Testimony of Seo, Jong-Bok A Korean Forcibly Relocated from Daegu-Korea to Miyako-Okinawa